

の各年齢層の平均値は 60 歳未満では健常人と差を認めないが、60 歳以上では有意に低値を示し、生理的低下以上に減少する傾向がみられた。

上記症例のうち 18 例の BMD の経時的変化を調べた。男性 10 例の 8 か月から 24 か月の年変化率は -8.9% から 17.4% 、年平均変化率は 0.3% で期間内に低下傾向はみられなかった。女性 8 例は全例閉経後で、8 か月から 28 か月の年変化率は -7.6% から 7.5% 、年平均変化率 -3.3% で、閉経後の健常人の年平均変化率 -0.9% より大きい低下率を示した。

以上、肝硬変症におけるカルシウム代謝異常等による骨塩量の変化を DPA により測定し、60 歳以上の女性の腰椎骨塩量減少を捉え得た。8-28 か月の経過観察にて、年平均変化率も女性において健常人より大きいことが示された。

5. 同時 2 核種シンチグラムによる胃内容排出時間と胃内胆汁逆流の測定

上畑 清文 谷村 弘 谷口 勝俊
落合 実 (和歌山医大・消外)
鳥住 和民 熊山 義孝 前田 真行
(同・放)

胃切除後の胃内容排出時間と胃内胆汁逆流の測定に、胆道・消化管シンチグラムによる同時 2 核種シンチグラムを用い、新しく考案した胃十二指腸吻合術式と標準 Billroth I 法を比較した。

胆道シンチグラムとして、 $^{99m}\text{Tc-HIDA}$ を 185 MBq (5 mCi) 静注し、消化管シンチグラムとして、試験食に In-DTPA を添加したものを摂取させ、その後仰臥位として経時的にシンチグラムのイメージを収録した。のちに再生したイメージの胃に相当する部位に ROI を設定し、90 分間観察し、そのカウント数より胃内容排出時間と胃内胆汁逆流の程度を測定した。

胃内容の排出率は両群間に有意差はなかったが、臨床的にダンピングテスト陽性のものは、胃からの排出は速い傾向にあった。また、胆汁の胃内逆流の程度は Billroth I 法の方が強く、胃ゾンデまたは内視鏡下に採取した胃液中総胆汁酸濃度とよく相関していた。

また、ヒストグラムの解析より、逆流症例において、Billroth I 法に比較して Billroth II 法では長時間胃内に逆流胆汁を認めた。

同時 2 核種シンチグラムによる胃内容排出時間と胃内

胆汁逆流の測定は、胃切除後の機能検査として、簡便で患者の苦痛も少なく、特にヒストグラムの解析より、胆汁逆流の程度とそのパターンがよく観察でき有用な検査方法である。

6. 食道静脈瘤硬化療法における血栓形成能の評価 ——血小板シンチグラフィーを用いて——

恵谷 秀紀 寺山 幸嗣 橋本 弘行
金 奉賀 中 真砂士 木下 直和
額田 忠篤 (国立大阪南病院・循)
福田 晴彦 東 哲郎 早川 勇二
椋田 知行 (同・消)
宇治 茂 鷲谷 文男 松岡 利幸
(同・放)

食道静脈瘤硬化療法部位における in vivo の血栓形成能を血小板シンチグラフィーを用いて検討した。対象は肝硬変症で食道静脈瘤を有する 2 例である。食道静脈瘤硬化療法は硬化剤として 5% ethanolamine oleate と 1% aethoxysclerol を用いて静脈瘤内外注入法にて施行した。血小板 imaging は In-111 標識血小板にて硬化療法前、直後、24 hr, 48 hr, 72 hr, 96 hr のシンチグラムを撮影、血小板集積の有無を、2 例で 3 回の食道静脈瘤硬化療法で判定した。症例 1 の血小板集積は negative、症例 2 の 1 回目の血小板集積は equivocally positive、2 回目の血小板集積は negative であった。

食道静脈瘤硬化療法部位における in vivo の血栓形成能を評価する目的で血小板シンチグラフィーを用いて、2 症例 3 回の硬化療法前後で検討したが、硬化療法部位には明らかな血小板集積は認めなかった。

7. $^{123}\text{I-IMP}$ の経小腸および経直腸同時注入法による門脈循環動態測定とその臨床的意義

池岡 直子 塩見 進 城村 尚登
福田 勝彦 植田 正 黒木 哲夫
小林 絢三 (大阪市大・三内)
下西 祥裕 大村 昌弘 小田 淳郎
越智 宏暢 (同・放)

【緒言】今回われわれは、小腸領域でアイソトープを投与するため腸溶カプセルを用いた門脈シンチグラフィを行い、同時に経直腸投与することにより上腸間膜静脈お